九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Prognostic value of chromosomal translocations in small-bowel diffuse large B-cell lymphoma

池上, 幸治

https://hdl.handle.net/2324/1654747

出版情報：九州大学, 2015, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

KYUSHU UNIVERSITY

（別紙様式２）

氏　　名	池上　幸治
論　文　名	Prognostic value of chromosomal translocations in small-bowel diffuse large B-cell lymphoma
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　赤司　浩一 副　査　　九州大学　　教授　　新井　文用 副　査　　九州大学　　教授　　前原　喜彦

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

びまん性大細胞型 B 細胞リンパ腫（DLBCL）は、リンパ節外非ホジキンリンパ腫の中でもっとも頻度が高い疾患である。特に小腸原発の DLBCL は稀であり、その臨床像は良く知られていない。今回、原発性小腸 DLBCL 症例においてレトロスペクティブに免疫グロブリン重鎖遺伝子（*IGH*）座を含むリンパ腫関連染色体転座の発生率および予後を調べた。当科で治療した原発性小腸 DLBCL 患者 35 例のパラフィン包埋組織を間期蛍光 in situ ハイブリダイゼーション法で解析し、*IGH*、*BCL6*、*MYC* および *BCL2* を含む転座を調査し、全生存（OS）および無増悪生存（PFS）率をカプラン-マイヤー法により評価した。*IGH*、*BCL*、*MYC* および *BCL2* を含む転座が、33 例中それぞれ 23 例（70%）、12 例（36%）、8 例（24%）および 6 例（18%）で検出された。*IGH* 転座を有する患者は、有しない患者よりリンパ腫の再発または進行の頻度が低かった。単変量解析により、若年齢、低い国際予後指標、*IGH* を含む転座、*MALT1/BCL2* および *BCL6* 免疫発現の過剰コピーが、より良好な OS および PFS に有意に関連することが示された。さらに多変量解析により、*IGH* を含む転座は、OS では有意差が認められなかったものの良好な PFS の独立した予後因子であることが明らかになった。
これらの結果は本分野における新しい知見であり、調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。